時評

町村併合と町村名

渡辺澄夫

名は体をあらわすものである。思いつきでつけた変な名は、本人の迷惑はもとより、役場い人も困ろう。地名も同様である。昔の国名は美字を用い、二字にせよという政府の指令により、国毎の慎重な堪申（研究して上申する）によつて決定したものである。今度の新らしい合併町村名は、果して慎重な検討が行われたものか。歴史家の立場から見れば、遺憾に思う所が必ずしも少くはない。

一例をあげると、大分郡庄内町の場合がある。もとの阿南村や東庄内・西庄内・南庄内等々の村が合併したものであるが、恐らく庄内と名のつく村が多いという政治的理由から決定されたものであろう。しかし、これを歴史的にみると、地方行政組織の最初のものである律令制では、賀来・石城川・由布川・挾間・阿南・庄内各村・谷村・稙田村の一部（小野鶴附近）を含めて阿南郷と呼ばれた。これから平安時代の終り頃賀来荘が分れ、鎌倉時代にその残りが阿南荘となつた。荘園制のこわれる室町―戦国期に、阿南荘内の自然村落が自治的団結を作つて村を称し、小挾間村とか武宮村・六郎丸村・上淵村などとなり、江戸時代の幕藩領の村となつた。さらに明治の郡区編成がこれらの村は合併されて大字となり、出来上つた村が最近までの村である。律令時代の戸数単位の郷が人口増加によつて小さく分れ、さらにそれが元のように大きく統合されつつあるのが、一千年来の村の歴史である。こうした歴史から見て、新らしい庄内町は阿南町とするのが、最も自然ではなかつたであろうか。

同様のケースは玖珠郡九重町にも見られる同町は東飯田村・野上村・飯田村・南山田村の合併したものである。南山田村は律令制では山田郷であつたかと思われるが、他の三村もはと〳〵飯田郷から分れたもの。九重町としたのは九重山のもつ観光面をうち出したものかと想像するか、久住町とも混同しやすい私はむしろ飯田町とする方が、飯田高原の魅力を強調するだけでなく、過去の伝統にも合致するのではないかと考えている。このような例は、詳細に検討すれば恐らく枚挙に遑がないであろう。

地名はその土地柄と長い歴史を背負つている。歴史家にとつては、古い地名はかけ替えのない重要な研究資料であるだけに、出来るだけもとのままに保存されることが望ましい新らしい理想をかかげた町村名はそれなりに意義があるが、満洲の開拓村を思わせるものや、大南町・清川村・栄村のような所在郡の比定に迷つたり、議員数の多少によつてとられたと思われるような町村名には、妥当性を欠くものが少なくない。私は一応律令制時代の郷、やのちの郷・荘・村と新合併町村との地域的範囲を考え、特別な支障のない限り、古い郷村名を生かすのが妥当であると考える。それは昔の伝統を生かし歴史を保存する意味からだけではなく、村名争いの無駄を省き、言わずして新らしい村を大同団結に導くからでもある。（筆者は大分大学教授）